

京都教区時報

京都教区広報委員会
(編集長 村上透磨)

京都教区本部事務局
京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

点訳版「京都教区時報」〈無料〉
ご希望の方は点訳ネット「レジナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。

TEL・FAX 079-431-8601

5頁～8頁 2018年 教区中学生広島平和巡礼

2018年 司教年頭書簡 「エコロジカルな回心」

回勅『ラウダート・シ』の呼びかけ

言は人間の間にテントを張って住まわ
れた。(ヨハネ1・14)

今年の京都教区時報の巻頭言は、司教年頭書簡、ひいては、教皇教書「ラウダート・シ」に基づいて、また、教区の聖書講座のテーマに沿って書かれています。

聖書講座は、4つの「和」を軸に前半と後半に分かれて、前半は「創造の過越の神秘」を軸に、後半は「受肉と新しい過越の神秘」を軸に組み立てられ、更に後半では「受肉」「復活」「終末(最後の過越)」を軸に。また、環境問題では避けて通れない「水」と「糧(パン)」の問題を加えた構成になっています。その中で既に、環境問題の多くは語られて来ました。今年残された教区時報の巻頭言は、あと3回です。今回は「受肉とエコロジー」の問題を考えてみます。

受肉の神秘とエコロジー

まず「受肉」という言葉が気にかかりま

愛のよろこび・イタリア語原本



す。英語で「インカーネーション incarnation」これはラテン語の「インカルナチオ」から来ている「託身」と訳されます。更に延長して「文化受容」とか「肉文化受容化」等と訳されます。

インカルナチオは「イン」(の中に、の中で)と「カルネ」(肉)との合成語。これを「言葉が肉の中に入った」「肉の中にいる者となった」つまり御託身の意味にとらえ、クリスマスに、これを説いています。(マタイはこれを「インマヌエル」と訳しました。マタイ1・23) 永遠の高み、父のもと

10
2018

で「遊んでいた知恵」が、言葉となつて、私たちの中に住まうものになられたというのです。

ここで「肉」という言葉を確認しておかねばなりません。肉とは肉欲に満ちた何か汚れた存在と観る人もいます。しかし、聖書が「肉」という時、靈魂と肉身を伴えた全人間(和)を指します。ただこの人間は、本質的に「神の似姿に似させて造られ」「神の息吹きによって、造られた」人間(アダム)を指します。人間が生きている時、本人が自覚しているか否かを問わず、「神との関わり」を本質的なものとし、神を語り、神を語らねば「人間」を語れない。このことが重要です。神を捨てた、現代人の悲劇の原因が、ここにあります。

(注、このことは、教皇の「使徒的勸告 愛のよろこび」の一つの根幹をなす考えであることに気づきました。

〈表紙の写真〉

クリスマスについては、とても美しい物語が生まれました。子供たちも胸をわくわくさせながら聞きます。イエス様がどんなに私たちを愛して下さったか、どんなに貧しく小さくなられたか、馬小屋

のあの美しい物語が子供たちを楽しませます。大人たちも、私たちが人間の惨めさに、共観して下さる幼きイエス・キリストを見て、美しい神学を組立てます。それを、歌い、祝い、すばらしい神学として語ります。環境問題とクリスマスの秘儀、そこでは特に貧しさの共観を語ります。貧しい人の境遇に照らし合わせながら、キリストの愛を歌います。それに心動かされ、何かを始める人もいるでしょう。すばらしいことです。でも、私は、「それだけかなあ」と思っています。きっと素直でないからでしょう。「これでいいのかなあ」と思う。

今、エコロジーについて考えている。これで、納得出来る解答を得ることが、私に出来るのだろうかと思えます。そこで、思い浮かんだ三つのことを書きま

す。

一つ目は、フィリピ2・6～11の「キリストの賛歌」やヨハネの「ロゴス賛歌」(ヨハネ1・1～18)です。たとえば「キリスト賛歌」

『キリストは神であったので、

無に至るまで「謙る者」となられた、

神はこれを右の座に上げられた。』

私の心を揺るがすのは、この「謙る」という言葉です。創造の秘儀や、受肉の「秘跡」「復活秘儀」を黙想しながら、この最もちいさな私の心を、心あわせるものになって下さった事への感動が生まれます。私はこれを「底辺まで下られたキリスト」というよりも、私たちが、どんな者であっても主の鼓動に耳をあわせる。キリストと、私が共振しあえるということなのです。「謙る」という意味をもっと深めねばならないと思っています。そこに何かがある、人間の本質、存在の本質に触れる何かがあるに違いないと。

二つ目は、「場」という言葉です。「キリストは、私たち全ての中に「場」を取って、住まわれた」という「こと」の中に受肉の神秘が隠されており、またエコロジーの問題に、一つの「光」しかも「霊の光」を感じます。まだ十分に言い表せませんが、私たちが、キリストと共に神の子として「生きる場」、それが「全被造物が存在する場」なのです。

「自然は、神のまほろ場、たたなずく人はうるわし。」

三つ目は、とても興味を持つことがあ

ります。私たちに、先住民と呼ばれる人たちのことです。また、アマゾンの流域やパプアニューギニアの奥深くに住む人々。アメリカインディアン先住民。他にアボリジニ（オーストラリア大陸と周辺島々の先住民）、日本ではアイヌ民族の方たちのことを言った人々がいます。私たちは、彼らの自然に対する接し方、その中で出会う神との関係、その生き方の中に、謙虚に尊敬を持って、学ばなければならぬことが一杯あります。

エコロジールについて語る時、私たちは彼らに学ばねばなりません。その生き方には、私たち現代人、文明人が失った数多くのものが残されています。彼らの方が文明をおごる我々より、うんと人間的であり、神に近い人だと。彼らについてもっと学んでみたいと思います。

今、彼らは滅んでいく運命にあると聞きます。彼らの住んでいる自然が破壊されただけでなく、文明人がもたらした病（伝染病）が彼らを滅ぼそうとしているそうです。何という皮肉!! 私たちにとって自然は、お金に見えます。自然は、開発されねばならないものです。でも、彼らにとって自然は、神によって生

かされ、神と共に生きていく、神聖な場なのです。

私たちキリスト者や修道者は、「肉の人」ではなく「霊の人」とならねばならないと思います。「欲望」と「エゴ」「おごり」と「無神論」を捨てねばならない。節制と愛の業にはげみ、謙虚に神を敬い従う人にならねばならないと思います。

ところで、パウロが「肉の人」「霊の人」という時は、「自分中心に生きる者」と「神中心に生きる者」との意味があります。自分が信仰者として、修道者として、霊的に励めば励むほど、自分が中心

になっている。自分が、神のようになっている事に注意しなければなりません。「霊の人」だと思いついていた私は「肉の人」となっているのです。ルシファーとミカエルの戦いが、私たちの中に、常にあります。

エコロジールという外見的な問題は、内なる霊の問題とは関係ないと思うかもしれませんが、ここにこそ、この問題の奥深さ、内的な真の改心、生き方、考え方、観方への回心を迫るのです。それがエコロジールの問題の根底にあると教皇は思っておられるのだと思います。年頭書簡の中に、受肉の神秘については明確に表されていないように思えます。でも、語らなくても、語っておられます。受肉という言葉は使わずに、その内容について語っておられるように思います。

5. 他者との関わりの回心
6. 自己との関わりの回心
7. 新しいライフスタイルを目指して

「言ことば」は、私たちが生きる場に、人となり、インマヌエル（共にあり、生き、働く者）となられた。ここは、神と共に生きる場である。

(村上透磨)



オーストラリア大陸と周辺島々の先住民

教会学校



小学生の信仰教育についてのアンケート⑦

アンケート⑦

☆「子どもとともにささげるミサ」は行われていますか。(34教会から回答) はい(17教会) いいえ(17教会)

☆いつ、どんな時に。

年2〜3回

教会学校の始業式・終業式、初聖体、復活祭、クリスマス、七五三、こどもの日。

月1回行われている教会もあります。

多くの小教区、またはブロックで、「子どもとともにささげるミサ」が行われています。

式文、説教、聖歌を子ども向きに工夫することはもちろん、侍者、朗読、奉納、聖歌伴奏などの典礼奉仕を子どもたちに担当してもらい、子どもたちの典礼への

積極的参加を促すことは、とても有意義なことです。

典礼における信仰教育が、教会学校だけではなく、教会共同体全体で協力しあっていることが、アンケートからうかがわれます。



洗礼を受けている子どもで、これから堅信と聖体の秘跡によって完全な入信へ導かれる必要のある者、および、最近、聖体拝領をした者に対して、教会は特別な配慮をしなければならぬ。

なぜなら、子どもが育つ現代の生活環境は、彼らの霊的成長のためにふさわしいとは言えないからである。

教会で子どもを教育する際に生じる特別な困難は、典礼祭儀、とくに感謝の祭儀が、本来の教育的効力を子どもに対して十分に発揮することができないことである。

子どもが教会の中で長い年月の間、ほとんど理解できないことを繰り返し経験し続けるとするならば、霊的損失をこうむるおそれがある。

幼児期および第一児童期における宗教体験は、この年代の子どもの独特の宗教的能力によって、その人格形成に深い影響を与えるからである。「子どもを抱き上げ……祝福された」(マルコ10・16)

キリストにならう教会は、このような状況にある子どもを、そのまま放置しておくことはできない。『子どもとささげるミサの指針』(カトリック中央協議会)より

中学生広島平和巡礼 感想文



歴史の中で、今を生きる

8月5日～7日にかけて広島平和巡礼に行ってきました。今年も姉妹教区である済州教区の中学生も参加し、司教、司祭、京都教区・済州教区の中学生が巡礼地で、戦争と平和について共に考えました。

交わり

九条教会 リーダー 松浦 留架

今年も8月6日に広島で中学生とともに黙祷をささげることができました。黙祷の時間は何度経験しても原爆投下の様子が脳裏に浮かび、心苦しくなりません。実際に当時の様子を見ていない私ですが、何度も被爆者証言を聞いたり資料館で遺品を見たりすることで、自分に当時の人の記憶が染みついたのだと思います。こうして歴史の一部とともに生きていくことこそ、今回の巡礼のテーマであ

る「歴史の中で、今を生きる」ということなのでしょう。

今回の巡礼では「交わり」を意識したプログラムを用意していました。特に、分かち合いの時間をたくさんとり、原爆の投下された前後や後遺症、また身近な平和について中学生と意見を交わしました。そのなかで済州教区の中学生の言った「原爆が投下されなければ韓国の戦争もなかったかもしれない、北朝鮮の問題もなかったかもしれない」という意見に驚きました。今まで、日本からの視点や、終戦に向けて、原爆投下後の広島のようななどは、学んで自分なりに消化していましたが、原爆投下後の韓国の歴史については、あまり結びつけて考えられてい



なかったことに気づかされました。

済州教区の人たちとともに広島平和巡礼を行うことは、中学生だけでなく、我々リーダーとして参加している大人も、自分からは見えていない違った視点で広島について、また平和について考えることができるいい機会になっていると感じます。このような交わりを与えていただけていることにも感謝し、日々の平和をかみしめながら生きていきたいと思いません。

広島平和巡礼に参加して

済州教区 モスルポ教会 イ・ミンジュ

広島に到着した後、幟町教会でパク・ナムジュ、ハルモニ（おばあさん）の被爆証言を聞いて「その時、私たちの韓国は日本の植民地だったが、米軍が日本に原子爆弾を落として日本軍が降参したことで、結果我が国が光復を迎えた。」とだけ習った歴史を、もう少し詳しく知るようになった。そして、8月15日光復節が、ひたすらうれしい日ではないということも悟った。

我が国が光復を迎える時、日本の多く

の一般市民の命が奪われたという事実
に、心が痛くなった。被爆証言を聞いて
心は痛むけれど、命を落とされた多くの
人々のために涙一粒流すことができない
自分自身がとても嫌だった。パク・ナ
ムジュ・ハルモニの被爆証言を聞いた後、
広島原爆事件を記憶して人々に知らせる
平和行進に参加した。

街を行進しながら犠牲になった魂を追
悼するために祈りを捧げた。普段そんな
に長く歩いたことがなく大変だったが、
原爆事件を体験した人々の苦痛とは比較
にもならないと考えて耐えた。

次の日、原子爆弾が落とされた中心地
にある相生橋に行つて、犠牲になった
人々のために黙祷して祈った。歳月が流



れてかなり変わったに違いないが、その
当時にはどれほど恐ろしい光景だったか
想像も出来なかった。黙祷が終わった後、
平和公園を見回った時、ふと目に入った
銅像が一つあった。それは「佐々木貞
子(さだこ)さんの碑」だった。12才と
いう幼い年齢で亡くなった貞子さんがと
てもかわいそうだったし、彼女を賛える
ために人々が折った鶴を奉獻するのを見
て、ぜひこの多くの人々の祈りを聞きたい、
天国で楽になっていることを願った。
平和記念資料館で、色んな資料を見なが
らもう一度悲嘆に暮れて心が痛んだ。特
に、わずか2才の子供が自転車に乗って
いて、原子爆弾で大切な命を失ったと
のことに驚くほかほかであった。その子の
ご両親はどれくらい心が痛かっただろう
か……自分の大切な子供を忘れることが
できなくて、その子が乗った自転車にそ
の子の魂が残っていることを信じ、ずつ
と自転車を保管したご両親が痛ましかっ
た。

その他にも、原子爆弾が落とされて発
生した熱のために、全身に火傷をした被
爆者の写真や崩れた建物を見て核の恐ろ
しさが骨身に染みた。彼らの犠牲の上に
今私たちが平和を享受しているというこ

とを今一度理解した。今回、やはり戦争
は起きてはいけなさと考えるようになって
たし、今まで何も考えずに過ごした自分
の人生を見直して、反省して省察できる
機会になった。

広島の被爆者証言を聞いて

山科教会 一年 西平 士紋

僕が広島平和巡礼で学んだ中で印象に
残ったことは、幟町教会で被爆者証言を
聞いたことです。その証言をしてくれた
パクさんという方の話を聞いてみると、
韓国から日本に来たため、いじめられた
り、訓練ばかりで勉強ができなかったり、



被爆する前から生活が苦しかったのだと思います。そして、僕たちのくらしとは全然ちがう生活を送って苦しかったのだろうなと思いました。

そして被爆した日、一九四五年八月六日をむかえました。その日は妹と弟といっしょに電車に乗っていたそうです。そして原爆が投下されました。投下された瞬間に黒い霧のようなものが広島をおおい、その黒い霧が晴れた時にはあたり一面がまるこげになっていて、建物もほとんど全部なくなり、人もいなかったそうです。僕はこの話を聞いてあたり一面が黒こげになっていた時はとてもこわかったし、家族がいなくなってしまうというかなしさもあったと思います。そ



んな体験をしながらも今も生きつづけているということがすごいと思いました。パクさんの話を聞いて核はもう二度と作ってはいけないし、使ってもいけないと思いました。被爆者証言は友達などとおして広めていかないといけないことだと思いました。世界から核が消えることを願っています。

平和を守るために

衣笠教会 三年 小西 和華

今年で三回目の広島巡礼だった。今年是全国的に暑く、熱中症にならない心配だったが無事に過ごすことができた。今回は最後の巡礼だったため気が引き締まり、被爆者証言や資料などを今まで以上に詳しく見聞きすることができた。その中でもパクさんの平和を実現するための言葉と分かち合いの話が心に残った。

まずパクさんは、平和を実現するために「人に優しく、思いやりの心を持つことが大切である」と言われた。私は戦争はけんかのようなものだと考えている。けんかは互いが優しく思いやりを持って接すれば減っていくものだ。けんかをし

ないようにすることは平和の一步である。しかし、私は妹とよくけんかをしているため、しないように気を付けたい。

次に、分かち合いは思い浮かなかった考えや韓国のことを交えた意見を聞けて面白かった。韓国のこととは勉強や休日のことである。チェジュの子が、韓国で原爆が投下され日本が降伏し韓国が解放されたと教わったが、詳しくは知らなかったため知れてよかったと話していた。また、日本では8月15日は終戦記念日でやっと終わった悲しい戦争だけど、韓国は植民地から解放された嬉しい日だと知り、複雑な気持ちになった。

今年の広島巡礼はチェジュの人たちも一緒だったから色々な考えを聞けて良かった。今回学んだことや感じたことをこれからに活かし、平和を守るために頑張りたい。

形なき平和

伏見教会 三年 深田 聖樹

僕は、今回の広島巡礼で「本当の平和」について考えた。二年前の中学一年生のときに来た広島とは全く違う感情を抱い

たことをまとめたい。

まず、一番印象に残っていることは、パクさんがおっしゃった「今、日本は平和だ」という言葉だ。確かに、原爆投下当時にくらべると、技術は発達して非常に安心な世の中となった。だが、僕はまだ平和ではないと思う。なぜ僕がそう思ったかという点、平和のとらえ方が違っていたからだ。僕の思う平和は、争いがなく、みなが笑顔でくらせることだ。それを踏まえて考えると、最低でも自分が生きている間には本当の平和にはなれないと思う。この世界、日本には様々な考え方や感情を持つ人がいて「十人十色」という言葉が似あう世界だ。その中で、争いのない暮らしが訪れることは考え難い。だが、平和への努力をすることは可能である。今日までの歴史の中で平和と完璧に言える時代はなかった。だから、すぐに平和になることは無理だ。これまでに経験のない「平和」な世界を目指すために、僕たちはこの二日間で体験したことを広めなければならない。

次に考えたことは、平和な世界を築くために何をすればよいのかということだ。よく、学校の授業などで「平和になるためには、どうすればよいですか」と

聞かれることがあるが、分かち合いで話していたように、答えがないことだと思う。その答えをたたくことは、非常に難しいと思うが、それを質問できる身近な存在が教会だと思う。自分が世の中のためにすべきことや、この世界でのあり方などを質問して、徐々に答えを出していければ良いと思う。

僕は、この二日間で人生で一番とっていいほど平和について考えた。平和は形のないもので、非常に抽象的である。その答えを出すことができたなら、人として、キリスト教徒として、一人前の大人になれるのではないかなと思う。そして、平和について考えるチャンスをくださった神様に感謝したい。



「京都教区いのち・平和・環境の日」の集い

- 日 時：11月17日(土) 13:00～17:00(ミサ16:00)
 場 所：カトリック河原町教会
 テーマ：①社会福祉ボランティア系
 (老人福祉、児童福祉、障がい者福祉)
 ②政治・経済問題系
 (原発、憲法、沖縄)
 ③人権問題系
 (死刑廃止、えん罪、差別、性・ジェンダー、外国人)
 ④生活環境・自然環境啓発系
 (気候変動、食生活、環境破壊、医療)
 主 催：京都教区いのち・平和・環境委員会

10月のお知らせ

教 区

聖書委員会／Tel.075(211)3484 ㊦㊧

聖書講座「回心 ー観想・祈り・詩うー」
 日 時：10日㊦ 19:00 11日㊦ 10:30
 テーマ：主よ、命の水をください
 講 師：北村 善朗師
 日 時：24日㊦ 19:00 25日㊦ 10:30
 テーマ：主よ、命の糧をください
 講 師：西 経一(神言会)
 会 場：河原町教会 ヴィリオンホール

よく分かる聖書の学び／Tel.075(211)3025
 日 時：3日㊦ 10:30
 講 師：北村 善朗師／参加費：300円
 会 場：河原町教会 ヴィリオンホール

福音宣教企画室／Tel.075(229)6800

福者ペトロ岐部司祭と187殉教者
列福10周年記念講演会
現代に生きる殉教者の精神
ー福者京都52殉教者を考えるー
 日 時：6日㊦ 13:30
 講 師：川村 信三師(イエズス会)
 会 場：河原町教会 ヴィリオンホール
 (入場無料・申込不要)

絵画を通しての祈りⅢ
カラヴァッジョ ボルゲーゼ美術館収蔵
《洗礼者聖ヨハネ》の秘密
 日 時：16日㊦ 19:00
 17日㊦ 10:30
 *両日とも同一内容
 講 師：木村 太郎氏
 (大阪芸術大学非常勤講師)
 大塚 喜直司教
 会 場：河原町教会 ヴィリオンホール
 受講費：500円(申込不要)

京都教区カトリック正義と平和協議会
 Tel. Fax.075(211)2291 Tel.㊦のみ

土倉鉦山跡と彦根教会を訪ねる 1日
 日 時：13日㊦ ①8:30京都駅集合→大津駅
 ②9:00大津駅集合
 参加費：3,000円／定員：27名
 持ち物：弁当、歩きやすい服装、水が浸
 みない靴か長靴(鉦山跡は水溜
 り多)

ブロック

奈良ブロック
浦上信徒大和郡山流配150周年
記念ミサと講演
ヴィリオン神父と浦上流配信徒
ーカトリック再宣教の夜明けー
 日 時：11月3日㊦
 講演 13:30/ミサ 14:30
 講師・司式：大塚 喜直司教
 場 所：大和郡山教会

修 道 会

男子カルメル修道会(宇治修道院)
 Tel.0774(32)7016 Fax.(32)7457

一般のためのカルメルの霊性(中川 博道師)
 日 時：13日㊦ 17:00~14日㊦ 16:00
 テーマ：イエスの聖テレジア
 参加費：7,000円

水曜黙想(中川 博道師)
 日 時：24日㊦ 10:00~16:00
 テーマ：ピンチの時は注意深く
 参加費：3,000円

諸 団 体

京都カトリック混声合唱団
 練 習：14日㊦ 14:00/27日㊦ 18:00 ミサ奉仕後
 カトリック会館6階

京都カナの会
 カナの会の集いのパーティー
 日 時：7日㊦ 13:00
 会 費：1,000円 カトリック会館6階

コーロ・チェルステ(女声コーラス)
 練 習：11日㊦ 10:00/25日㊦ 10:00
 カトリック会館6階

聴覚障がい者の会(どなたでも参加可)
手話表現学習会(聖書と典礼)
 日 時：11日㊦ 13:00 カトリック会館6階

心のともしび 番組案内
 テレビ(衛星スカパー・ケーブル)スカイA
 毎週土曜日 朝7:45
 シリーズ「喜びと平和のうちに」
 出演は松村 信也師(イエズス会)
 ラジオ(KBS京都) ㊦~㊧ 朝5:55
 ㊦ 朝5:15

10月のテーマ「今日の祈り」

教区広報委員会からのお知らせ

※ お知らせに載せたい情報は、原稿締切り日までに教区本部事務局宛に Fax.075 (211) 3041か honbu@kyoto.catholic.jp に発信者のお名前を明記してお寄せください。

※ 12月号の原稿締切り日は10月24日㊦です。

大塚司教の

10月のスケジュール

Schedule of Bishop Otsuka



- 1日(月)-2日(火) カトリック大阪教会管区部落差別
人権活動センター教区担当者会議(小豆島)
- 4日(水) 10:00 中央協 常任司教委員会
- 6日(金) 13:30 福者京都52殉教者 列福10周年
記念講演会(河原町教会)
- 7日(土) 10:30 福者京都52殉教者 列福10周年
感謝ミサ(河原町教会)
- 8日(日) 13:00 フランシスコ・ザビエル
中野裕明被選司教 司教叙階式
(鹿児島県文化センター 宝山ホール)
- 13日(土) 聖母の小さな学校 スポーツフェスタ
- 14日(日) 15:00 アッパレシーダの聖母ミサ
(四日市教会)

- 15日(月) 14:00 司教顧問会
- 16日(火) 19:00 「絵画を通しての祈りⅢ」
(カラバッジョ講演会)
- 17日(水) 10:00 「絵画を通しての祈りⅢ」
(カラバッジョ講演会)
- 20日(土) 16:00 上野教会 子供行事/
19:30 上野教会ミサ
- 21日(日) 10:00 セニョール・デ・ロス ミラグロス
のミサ in 鈴鹿
- 22日(月)-26日(金) 教区司祭 年の黙想
(軽井沢 宣教クララ修道会 黙想の家)
- 27日(土) 15:00 ノートルダム教育修道女会
誓願金祝感謝ミサ(岩倉)
- 28日(日) 11:00 丹後教会・網野教会堂ミサ
- 29日(月)-30日(火) 大阪教会管区司教会議

青年センター「1日企画」

京都カトリック青年センターでは今年度、高校生を含む青年たちが定期的に集い、祈り、分かち合う時間をつくりたいと思い、月に一度の「1日企画」を実施しています。

〈7月28日「1日企画」報告〉

河原町教会 栗山 透

今年度から始まった青年センターの1日企画、3回目となる今回は望洋庵の企画に参加する形で、望洋庵の月イチ黙想会に参加してきました。



【青年センター-HP】 携帯からでもご覧いただけます。 <http://www.kyoto.catholic.jp/seinen/>

テーマ「かみさま、あのね」のもと、私たちがどのように祈ればよいのか、そもそも祈りの基本とは何なのかについて考える時間となりました。

〈10月はロザリオの月〉

河原町教会 奥塾のぞみ

10月の「1日企画」では、ロザリオの祈りを捧げます。高校生以上の青年たちと集い、共に祈ることができたらと考えて、みなさまの参加をお待ちしております。

日時：10月20日(土)

開始時刻はHPをご覧ください。

場所：カトリック西院教会

※高校生以上～参加可

※夜は青年交流会を予定しています

※高校生は宿泊できません

※宿泊される方は事前に青年センターにご連絡ください。

詳細はHPをご覧ください。

皆様の参加をお待ちしております。

青年センターあんでな